

フードシステムの全体構造を捉える分析枠組みに関する一考察

農林水産政策研究所 八木 浩平

1. フードシステム学の課題

フードシステムとは、「食料品の生産・供給、消費の流れにそった、それらをめぐる諸要素と諸産業の相互依存的な関係の連鎖」と捉えることができる[1、2]。このフードシステムは、各産業や行政、消費者等の多様な主体間の関係から構築されるため、その複雑な全体構造の把握は非常に難しい。本報告では、垂直的な市場構造を把握するための分析枠組みについて幾つかレビューした上で、既存の枠組みの改良を試みることを目的とする。

改良に当たっては、以下の点に留意する。フードシステム学の課題として、成果(Performance)をどのように理解し、評価すべきかという点がある。古典的な産業組織論では、市場の構造(Structure)が企業の行動(Conduct)を規定し、それらが成果(Performance)に影響を与え、産業構造を変化させるとする SCP パラダイムを基に分析する。この SCP パラダイムを垂直的な産業構造の分析に当てはめた研究として Marion et al.,[3]等があるが、その際、成果をどのように理解し、評価していくべきか、未だ統一的手法は提唱されていない。本報告では、こうした課題の検討も行う。

2. 既存の分析枠組みのレビュー

1) Kaplinsky et al.,[4]のバリューチェーン分析の枠組み

Kaplinsky et al.,[4]の枠組みは、分析の問題意識の例と、生産から消費までの流れを理解するための手順を提示しており、体系的で扱いやすい。また成果の評価指標として、アップグレード等の

複数の視点が採用されている。ただし、多様な主体間の相互依存関係に規定されるフードシステムを検証するには、視野の狭いところが認められる。

2) Marion et al.,[3]のサブセクター分析の枠組み

既述の通り Marion et al.,[3]は、垂直的な産業構造の検証に SCP パラダイムを当てはめた分析枠組みを提示した。ただしその分析枠組みは、SCP パラダイムの枠組みが形式的に踏襲された印象が強く、ケーススタディの分析枠組みとして活用し難い致命的な欠点を有している。

むしろ、Marion et al.,[3]の貢献として重要な点は、垂直的調整の分析枠組みを提示している点であろう。ここで垂直的調整とは、現物取引市場から、契約や戦略的提携、垂直統合に至るまでの垂直的主体間の取引活動のことである。Marion et al.,[3]はこの垂直的調整の成果について、「資源分配」、「公平性」、「取引費用」等の5点から評価する方法を提示した。こうした多様な成果の評価指標を認めるべきとする見解は、フードシステムを検証する上でも参考になる。

3) Lutz et al.,[6]の分析枠組み

Lutz et al.,[6]は、食料品マーケティングシステムを、市場(水平的側面)、異なる市場間の関連(空間的側面)、マーケティングチャンネル(垂直的側面)の3側面に分類し、それぞれを SCP パラダイムに沿って分析する枠組みを提示した。また成果の分析を、「有効性」、「公平性」、「効率性」といった指標に分類して行っている。この枠組みは、マーケティングシステムを多様な側面に分類することで、全体像の理解を容易にしている。ただし、本分析枠組みはフードシステムを垂直的な制度的機構として捉えたものでないため、こうしたアイ

表1 フードシステムの成果の評価指標の例

研究の目的の例	成果	指標の例	対象となる副構造
「川上」と「川中・川下」のミスマッチ	公平性	所得分配の状況、価格伝達性、賃金、フードシステム内での売上高・付加価値・収益のシェア(市場支配力が構成主体からの搾取に繋がっていないか)	「連鎖構造」、「競争構造」、「企業構造・企業行動」、「企業結合構造」
多様な環境変化に伴うフードシステムの構造転換の補足	効率性の変化(アップグレード)	コスト面での競争力、品質、リードタイム、収益性、価格伝達性、売上高、新製品の売上高の全体に占める割合、不要な垂直的段階は存在しないか	「連鎖構造」、「競争構造」、「企業構造・企業行動」
	公平性	所得分配の状況、価格伝達性、賃金、フードシステム内での売上高・付加価値・収益のシェア(市場支配力が構成主体からの搾取に繋がっていないか)	「連鎖構造」、「競争構造」、「企業構造・企業行動」、「企業結合構造」
	市場や情報へのアクセスビリティ	各段階の参入障壁(規模の経済、製品の差別化、流通段階の長期取引関係等)、取引市場の開放度	「連鎖構造」、「競争構造」、「企業構造・企業行動」
	動的安定性	生産量、価格、正確な情報提供	「競争構造」
	健康への影響	栄養価、疾病率の変化	「消費構造と消費者の状態」
	食料安全保障	食料自給率(金額、カロリーベース)	「消費構造と消費者の状態」

注：動的安定性とは、「蜘蛛の巣理論」で論じられる生産と価格の周期的な変動を安定させることを指す。

デアをフードシステム学に適用する必要がある。

後はこの表について、これまでのフードシステム学における研究成果の整理を通じてブラッシュアップしていくことが求められる。

4) 新山[1]のフードシステムの構造論的分析枠組み

このフードシステムの構造論的分析枠組みとは、「解明の対象とすべき全体構造を幾つかの副構造に分割し、それぞれの副構造を解明し、かつ副構造相互の関係を明らかにすることによって、全体像に接近する方法[1]」である。この枠組みの有用な点は、複雑なフードシステムを5つの副構造に分割して検証することで、多様な側面からの分析を可能にし、且つ分析に必要な情報を集約している点にある。副構造の相互関係の整理を通して、構成主体の主体間関係と、構造変化の規定要因の理解を可能としている。ただし「成果」の概念が存在しないため、これまでレビューした分析枠組みと違い、構造変化前後のどちらが望ましい状況であるのか評価する視点が欠けている。

3. 分析枠組みに関する考察

以上を踏まえて本報告では、複数の副構造に分割することで複雑なフードシステムの主体間関係を明示できる新山[1]の枠組みに、成果の評価方法を付加することを検討する。その成果の評価方法として、他の3つの分析枠組みで行われていたように、多様な成果指標を用いることとする。そこでは、①研究目的の確認、②成果項目の決定、③成果指標の決定、④構造変化前後の成果の比較の、4つの手順に沿った整理が必要である。なお成果指標等についてまとめたものが、表1である。今

参考文献

- [1] 新山陽子 『牛肉のフードシステム 欧米と日本の比較分析』東京：日本経済評論社、2001。
- [2] 辻村英之 『コーヒーと南北問題 「キリマンジャロ」のフードシステム』東京：日本経済評論社、2004。
- [3] Marion, Bruce and the NC-117 Committee. *The Organization and Performance of the U.S. Food System*, Lexington: Lexington Books, 1986.
- [4] Kaplinsky, Raphael and Mike Morris “A HANDBOOK FOR VALUE CHAIN RESEARCH” IDRC, 2000.
- [5] Barkema, Alan “New Roles and alliances in the U.S. Food System”,(Schertz, Lyle P., Lynn M. Daft edited *Food and Agricultural Markets; The Quiet revolution*, Washington: Economic Research Service, 1994). (邦訳 小西孝蔵、中島康博『アメリカのフードシステムー食品産業・農業の静かな革命』東京：日本経済評論社、1996)
- [6] Lutz, C. and a.van Tilburg “FRAMEWORK TO ASSESS THE PERFORMANCE OF FOOD COMMODITY MARKETING SYSTEMS IN DEVELOPING COUNTRIES WITH AN APPLICATION TO THE MAIZE MARKET IN BENIN”(Asenso-Okyere, W.K., George Benneh, Wouter Tims *Sustainable Food Security in West Africa*, Boston: Kluwer Academic Publishers, 1997)